

鈴木増雄先生の紫綬褒章受賞を祝して



鈴木増雄先生（理学部名誉教授）が、平成10年秋の叙勲で紫綬褒章を受賞されました。私たち物理学教室一同にとりまして、この上もない喜びであり、心よりお祝い申し上げます。

鈴木先生は、昭和36年東京大学理学部物理学科を卒業後、同大学数物系大学院に入学、昭和41年に博士課程を修了し理学博士号を授与されました。理学部助手になられた後、昭和43年に東京大学物性研究所助教授に任ぜられ、昭和48年に理学部助教授に転任、昭和58年に教授に昇任されました。平成5年には大学院理学系研究科教授（理学部教授兼任）になられ、平成9年3月に定年退職されるまで、基礎物理学講座教授として、統計力学の教育、研究に尽力されました。情熱あふれる講義をされ学生に感銘を与えるとともに、研究室からは多くの秀れた研究者、教育者を輩出されています。この間、物理学科主任、理学部評議員として、教室、理学部、大学の運営に貢献されました。

先生のご専門は統計力学です。特に、相転移、臨界現象の理論において、大学院生時代から多くの先駆的研究をされ、その後も一貫して統計力学の発展に指導力を発揮されてきました。ことに、一般的相関等式、リー・ヤン定理の拡張、可解模型、動的臨界現象、臨界緩和関数、巨視的秩序形成のスケーリング則、量子モンテカルロ法、スピングラスの非線形帯磁率、相転移の一般論、量子解析について大きな貢献をされたことは特筆すべきことと思います。これらの業績は独創的であり、世界的にも高く評価されています。一度、雑談の中で研究の秘訣をお尋ねしたところ、「梅雨の時が一番落ち着いて思考ができる」とのことでした。昭和53年には揺らぎと非線形性の相乗効果に関する新しい視点を提起した巨視的秩序形成のスケーリング則理論の発見に対して松永賞、昭和61年には鈴木・トロッター公式に基づく量子モンテカルロ

和 達 三 樹 (物理学専攻)

wadati@monet.phys.s.u-tokyo.ac.jp

法の開発に対して仁科記念賞、コヒーレント異常という新概念を導入した平均場近似の拡張に基づく相転移の一般論に対して昭和62年には井上學術賞、平成元年には東レ科学技術賞を受賞されました。また、統計力学への長年にわたる貢献に対して平成7年にはフンボルト賞（ドイツフンボルト財団）を受賞されています。

統計力学は古い歴史をもつ一方、絶えず新しい対象と手法を開拓して発展してきました。先生の研究においても、まさに同様です。研究対象は平衡系から非平衡系へ、古典論から量子論へ、スピン系から粒子系へと大きな広がりをもっています。そして、研究手法は、数学的厳密さに基づく方法から、経路積分に基づく数値計算まで、幅広く独創的な手法を開発されました。興味ある難問に絶えず挑戦され、新しい解析法の開発や新しい数値計算法の提唱によって、統計力学の研究に多大な貢献をされました。現在、相転移に関する教科書は多数出版されていますが、それらは1960年中頃から爆発的に発展した現代的相転移理論の賜物です。この発展の中で、鈴木先生が常に先駆的な仕事をされ、日本のみならず世界的に指導的役割を果たされたことは、私達後輩にとって大きな励みであり、また誇りであると思います。

先生は教育、研究に尽くされる傍ら、文部省学術国際局科学官、文部省学術審議会専門委員、学位授与機構審査会委員等として、我国における理学の研究、教育の整備、発展に尽力されました。その他京都大学基礎物理学研究所運営委員会、京都大学数理解析研究所専門委員会、日本学術会議物理学研究連絡委員会、新技術事業団新技術審議会専門委員会、理化学研究所基礎科学特別研究員審査委員会などの委員を務められました。国際的にも統計物理学分野の各種国際委員会の委員を務められました。ことに、国際純粋及び応用物理学連合（IUPAP）の熱力学・統計力学専門委員会委員として、統計力学に関する国際会議の組織運営にあたり、会議を成功に導くのに大きな貢献をされました。

鈴木先生は、現在東京理科大学理学部教授を務めておられます。教育・研究において、また、仁科財団常務理事、本田財団評議員等の役職において、以前にもまして活発に科学振興に尽力されています。先生が今後ますますお元気に、日本の物理学および学術の発展にお力添えてくださいますよう、お祈り致します。